國學院大學学術情報リポジトリ

擬似的文法表現の地理的傾向：とりたての発想法をめぐって：特集多様化する日本語研究の現在

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 隆, Kobayashi, Takashi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000423

擬似的文法表現の地理的傾向
—とりたての発想法をめぐって—

小林　隆

1．語用論から見た文法

この論文では文法の地域差として、構造的な意味でのいわゆる「文法」が発達しておらず、語用論的な操作でそれらしく文法的なニュアンスを表している地域があるのではないかという仮説を述べる。そのような、狭い意味での文法とは言いにくいが、語用論的に見て文法の代替措置とみなされる表現を、ここでは「擬似的文法表現」と呼ぶことにする。

擬似的文法表現に注目するというのは、対象を表現法のレベルへと拡大し、少し広い視野から文法の地域差を考えてみようということでもある。共通語の感覚からすれば、それは文法ではなく表現法の範疇だと思われる方法で、ある種の文法的意味を実現しようとする、そうした共通語の発想法とは異なる言葉の世界を覗いてみようと考える。

こうした問題については小林隆（2007）で最初に取り上げ、その後も小林隆（2010・2015・2017）で概括的に、あるいはトピック的に触れてきた。ここでは、あらためて「とりたて」という文法範疇を取り上げ、より詳細に見ていくことにする。特に、とりたての専用形式であるとりたて助詞[(1)]が十分発達しておらず、擬似的文法表現によってその文法的意味が代替される傾向のある地域が存在することについて述べる。

論の進め方は、次のようにまず「は」の話から入り、次にとりたて助詞全般の傾向を押さえ、擬似的文法表現の方法について整理しながら、最後にその発想法について考える。

（1）不活発な「は」
（2）とりたて助詞全般の傾向
（3）擬似的文法表現の方法
（4）擬似的文法表現の発想法

資料としては、国立国語研究所の『方言文法全国地図』（ＧＡＪ）を使い、現

象の地理的広がりの中でこうした問題を考えていく。その際、ＧＡＪでは当該の項目のねらいから外れるという判断で、「無回答」や「その他」に分類されてしまった回答にも積極的に注目し、擬似的文法表現の可能性を探り出してみたい。このため、地図本体のほか、各地点の具体的な回答を載せる「資料一覧」も利用する。

２．不活発な「は」

共通語では、とりたての機能を担う助詞のひとつに「は」がある。方言では、その「は」の不活発な地域が存在する。

ＧＡＪには、次のように「は」の使用を確認できる地図が９枚ある。各項とも矢印の左側に地図の項目名、すなわち、共通語的な言い方を載せたが、それが矢印の右側のように「は」を使わない表現となって現れる場合がある。このうち、第10図～第16図は、口語的には共通語でも「は」を入れない言い方が不可能ではないが、その場合にはとりたてにならないか、その意味合いが薄い。第17図・第225図は、「は」を入れないとそもそも不自然な文である。第161図以下は、「は」を用いない「見ない」「来ない」等の言い方はもちろん自然であるが、それだととりたての文ではなくなってしまう。

○第10図「あれは学校だ」→「あれφ学校だ」
○第11図・第12図「ビールは飲まないが、酒は飲む」→「ビールφ飲まないが、酒φ飲む」
○第16図「ここに有るのは何か」→「ここ有るのφ何か」
○第17図「行くのではないか」→「行くのでφないか」
○第225図「行ってはいけない」→「行ってφいけない（だめだ）」
○第161図「見はしない」→「見ない」
○第162図「来はしない」→「来ない」
○第152図「行きはしなかった」→「行かなかった」
○第159図「高くはなかった」→「高くなかった」

このうち、「見はしない」の地図（質問文：「あの人はテレビなど**見はしない**」）を簡略化して**図１**として示した。ここには「見はしない」の類と「見ない」の類のみ載せており、それ以外の回答は省略した。なお、「見はしない」にはミヤシナイ、ミャーシナイなどのほか、ミヤセン、ミャーセン、ミリャーセンなど「見はせぬ」の類からの変化形も含め、「見ない」にはミン、ミランなど「見ぬ」の類からの変化形も含めた。

この図を見ると、「は」を使用しない地域は東北・北関東から北陸にかけて広がり、一方、九州・琉球にもある程度集中する地域は見られるものの、概して西日本には少ないことがわかる。この傾向は他の項目についても同様に把握できる。ただし、「あれは学校だ」「ビールは飲まないが、酒は飲む」「ここに有るのは何か」

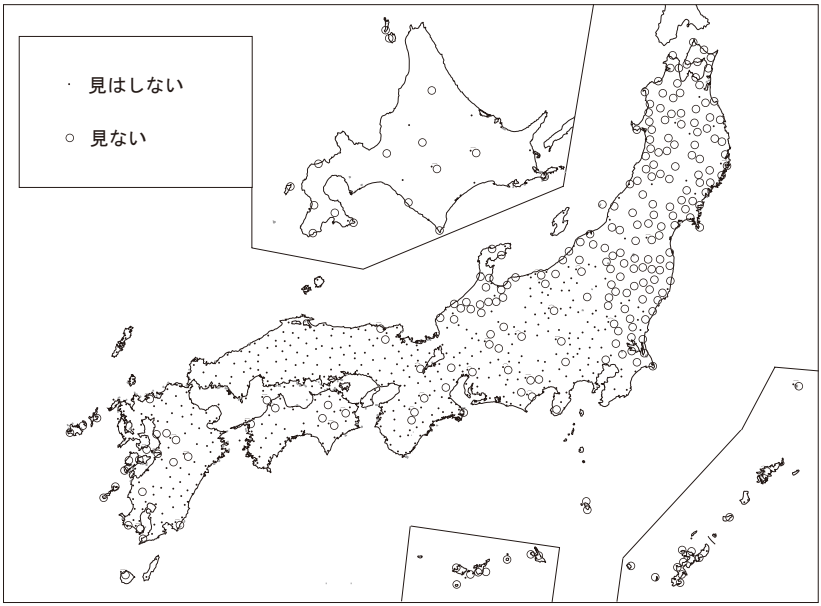

図１　「見はしない」（ＧＡＪ第161図より）

では近畿にも「は」の不使用地域が固まって現れる。これは「は」のもつ主題提示の用法が関係しているのではないかと思われるが、その点にはここでは踏み込まない。

また、最近の国立国語研究所共同研究プロジェクト「方言の形成過程解明のための全国方言調査（ＦＰＪＤ）」（大西拓一郎代表）では、上の「行くのではないか」との関連で、名詞述語の打ち消しについても「先生ではない」（Ｇ-022）という調査項目が加えられた。その結果を地図化してみると、やはり東北から北陸にかけての地域に、「は」を用いない傾向が顕著に浮かび上がる。

３．とりたて助詞全般の傾向

とりたて助詞の不活発さは「は」に限らず、他の形式にも観察される。「でも」「だけ」「なんか」「こそ」について見てみよう。

（１）第44図「お茶でも（飲もう）」

「でも」は選択的例示を役割とするとりたて助詞であるが、この「でも」に当たる形式が得られず、「無回答」と判断された地点が存在する。「資料一覧」（『方

言文法全国地図解説１』367頁）によって、そうした地点の実際の回答を確認すると、次のようになっている。ここでは、読みやすさの便宜のため、琉球方言を除き「資料一覧」の表記を統合し、かつ、回答を分類して示す。（　）内は回答地点であるが、表示は琉球地方と島嶼部を除き市町村の単位までとし、大字以下は省略する。

○「茶φ」の類

チャ（秋田県鹿角市）／オチャ（北海道爾志郡乙部町、宮城県遠田郡涌谷町、茨城県石岡市、岐阜県大野郡白川村、同瑞浪市、石川県小松市）／オジャ（岩手県東磐井郡藤沢町）／チャー（福井県大飯郡大飯町、熊本県宇土郡三角町）／オチャー（群馬県多野郡万場町）／オジャー（岩手県下閉伊郡岩泉町）

○「茶を」の類

オチャオ（群馬県利根郡片品村、福井県敦賀市）／チャバ（熊本県上益城郡矢部町）

○「茶に」の類

オジャッコニ（岩手県下閉伊郡川井村）／オチャサ（栃木県那須郡黒羽町）

○「茶（の）一杯」の類

オチャノイッパイ（北海道釧路郡釧路町）／チャイッパイ（岐阜県吉城郡河合村）

○「一服する」の類

エップグ　ノマスベー（岩手県大船渡市）

このうち、「茶φ」の類に分類した「チャー」などの長音化形式は、その部分が附属形式に相当する可能性があるので、一応注意が必要である。「茶に」の類は動詞部分が回答されていないが、「お茶にしよう」といった言い方が答えられたものと考えられる。

以上のデータが示すように、「でも」に当たるとりたて助詞が得られず、「無回答」に分類された地点はさほど多くはない。ただし、全体の地理的傾向を見ると、それらの地点は、明らかに西日本より東日本に多いことがわかる。

（２）第48図「（食って）寝るだけなら」

「だけ」は限定の機能を担う。この項目では、条件節の中に入り込む「だけ」を問題にしている。このような「だけ」に相当するとりたて助詞が得られず、「無回答」に分類された回答を挙げると次のようになる（『方言文法全国地図解説１』379頁）。

○「寝るなら」の類

ネルナラ（北海道三笠市、同奥尻郡奥尻町、同爾志郡乙部町、同亀田郡椴法華村、福島県いわき市、新潟県三島郡出雲崎町、群馬県館林市、静岡県榛原郡川根町、同浜松市、岐阜県大野郡高根村、同瑞浪市、石川県輪島市、京都

府綴喜郡井手町、福岡県鞍手郡小竹町、熊本県八代郡泉村、同芦北郡津奈木町）／ネーナラ（鳥取県西伯郡中山町）／ネンナラ（熊本県安殊郡久木野村、鹿児島県鹿児島郡十島村）／ヌンナラ（長崎県南高来郡有家町）／ヌンナラバ（熊本県菊池市）／ヌンナイ（佐賀県神崎郡三瀬村）／ネテルナラ（静岡県浜松市）／ネルダラ（岩手県江刺市、静岡県賀茂郡東伊豆町）／ネルダバ（山形県西田川郡温海町）／ネレバ（北海道余市郡余市町）／ネースラバ（岩手県一関市）／ネルト（島根県隠岐郡西郷町）

○「寝るのなら」の類

ネルノナラ（三重県員弁郡藤原町）／ネルンナラ（群馬県館林市、長野県下伊那郡清内路村、岐阜県大野郡荘川村、石川県加賀市、三重県一志郡白山町、広島県双三郡布野村、徳島県勝浦郡上勝町、大分県南海部郡米水津村）／ヌーンナラ（熊本県玉名郡長洲町）／ネルノダラ（青森県上北郡横浜町、同八戸市、岩手県岩手郡松尾村）／ネルンダラ（北海道礼文郡礼文町、同浜益郡浜益村、同山越郡八雲町、青森県上北郡東北町、宮城県亘理郡亘理町）／ネルノダバ（青森県下北郡脇野沢村）／ネンノダバ（新潟県村上市）／ネルノダッタラ（青森県八戸市）／ネルンダッタラ（山口県大島郡大島町）／ネルジャッタラ（山口県大島郡大島町）／ネルガナラ（富山県富山市、同下新川郡朝日町）／ネルガンナラ（新潟県南魚沼郡六日町）／ネトルガナラ（富山県氷見市）／ネルアダラ（青森県上北郡六ヶ所村）／ネルトナラ（福岡県福岡市）／ヌットナラ（長崎県大村市、鹿児島県薩摩郡下甑村）／ネルソナラ（福岡県北九州市）

○「寝るようなら」の類

ネルヨーナラ（北海道足寄郡陸別町）／ネルヨッタバ（秋田県北秋田郡阿仁町）／ネルヤッタバ（秋田県北秋田郡阿仁町）／ネルゴッタラ（秋田県北秋田郡阿仁町）／ネルゴッタバ（秋田県北秋田郡阿仁町）／ネッコンダバ（山形県西置賜郡小国町）／ネーコッナラ（鹿児島県肝属郡田代町）／ヌルモンナラー（長崎県北高来郡飯盛町）

○その他

ネテルバンデ（宮城県亘理郡亘理町）／ネルジャー（山梨県北都留郡小菅村）／クッテスグネルヨーデワ（北海道足寄郡陸別町）／タベテスグネルヨーデ（北海道足寄郡陸別町）／タベテスグネル（北海道足寄郡陸別町）

以上のとおり、この項目ではとりたて助詞を使用しない回答がかなりの数に上った。それらの多くは北陸を含む東日本からの報告であり、西日本では九州にそうした回答が目立っている。それらに比べると、近畿・中国・四国の回答は少ない。

（3）第54図「傘なんか（いらない）」

「なんか」は否定的特立を表すとりたて助詞であるが、これに当たる形式が回

答されなかった地点がある。ただし、そうした回答は、この項目では「無回答」扱いではなく地図化されている（「無回答」に分類された回答はない）。すなわち、凡例上〈（ＫＡＳＡ）〉と表示されたものがそれであり、これは「傘φ」とみてよい。回答地点を以下に示そう（「カラカサ」が１地点あったほかはすべて「カサ」である）。

○「傘φ」の類

北海道礼文郡礼文町、同苫前郡羽幌町、同江別市、同根室市、同爾志郡乙部町、青森県下北郡大間町、同上北郡横浜町、同北津軽郡鶴田町、同西津軽郡岩崎村、同三戸郡田子町、岩手県花巻市、同釜石市、宮城県気仙沼市、同柴田郡川崎町、茨城県石岡市、新潟県岩船郡粟島浦村、同岩船郡山北町、同岩船郡関川村、同佐渡郡相川町、富山県富山市、同西砺波郡福光町、石川県鹿島郡能登島町、同小松市、同輪島市、同羽咋郡富来町、同石川郡吉野谷村、福井県大飯郡大飯町、同遠敷郡名田庄村、岐阜県瑞浪市、三重県名張市、同度会郡大宮町、同度会郡南勢町、同多気郡宮川村、同尾鷲市、京都府北桑田郡美山町、兵庫県三田市、奈良県宇陀郡榛原町、同吉野郡十津川村、島根県鹿足郡津和野町、広島県呉市、同安芸郡倉橋町、愛媛県新居浜市、福岡県北九州市

これを見ると、多くの回答が福井・岐阜・三重のラインより東の地域から上がってきており、それより西の地域は少ないことがわかる。特に北海道・東北から北陸にかけての地点が目立っている。

なお、地図の凡例上、〈（ｋａｓａａ），（ｓａｎａａ）〉に分類された地点は、末尾が伸びるものである。こちらは「は」などの助詞が融合している可能性があるので除いておくが、分布は〈（ＫＡＳＡ）〉の地域に類似しつつそれよりは少し広がる。

（４）第60図「今日こそ（終わらせる）」

特立の「こそ」に相当するとりたて助詞が得られず、「今日φ」と回答された地点がある。地図の凡例上、〈（ＫＹＯＯ）〉と示された地点である。回答のバリエーションは「今日φ」のみであるが、前後に「どうしても」や「もう」に当たる副詞が付随して報告された場合があり、「資料一覧」に当たって引用すると次のようになる（『方言文法全国地図解説1』428頁）。

○「今日φ」の類

キョー（岩手県二戸市、福島県二本松市、新潟県村上市、千葉県千葉市、同長生郡白子町、岐阜県高山市、同不破郡関ヶ原町、同瑞浪市、奈良県吉野郡西吉野村、広島県竹原市新庄町、福岡県遠賀郡芦屋町）／kju:（沖縄県石垣市字石垣、同宮古郡伊良部村字仲地）／su:（沖縄県八重山郡与那国町字与那国）

○「どうしても　今日φ」「今日φ　どうしても」の類
ドーデモ　キョー（群馬県利根郡新治村、静岡県榛原郡御前崎町）／ドガンシテデ　キュー（佐賀県佐賀市）／ナンデモカンデモ　キョー（岐阜県吉城郡河合村）／キョー　ナンデカンデ（福島県伊達郡保原町）／キョー　ナンラー（鹿児島県熊毛郡南種子町）／キョー　シャッテモ（京都府与謝郡岩滝町）／キョー　キット（新潟県村上市、大阪府豊能郡能勢町）

○「今日φ　もう」の類
キョー　ハー（青森県三戸郡五戸町）／キョー　ハー　ナ（岩手県稗貫郡大迫町）

このほか、凡例上、〈その他〉に分類された回答に次のものがある。

○「今日いっぱいで」の類
キョーイッパイデ（富山県魚津市）／suːφittʃiːni（沖縄県国頭郡国頭村字佐手）

さらに、この項目では凡例上「無回答」が設けられているので「資料一覧」でその内容を確認すると、次のようである。

○「今日の終わりに」の類
キョーノオワリニ（秋田県湯沢市）

○回答なしの地点
福島県耶麻郡西会津町、愛知県尾西市、同安城市

以上を全体的に眺めると、とりたての「こそ」に当たる形式をもたない地域は東日本と九州以南に多いことがわかる。最後の「回答なしの地点」は、話者にとって適当な形式が思い浮かばないために、回答自体がなされなかったのではないかと推測される。

なお、「今日で」「今日に」などの回答も、付属形式は付いているものの格助詞であり、とりたて的ではなさそうである。一応、それらの分布も確認すると、「今日φ」の場合と比べてやや西日本に広がるものの、大体同じような様相を示すとみてよい。

４．擬似的文法表現の方法

前節では、とりたて助詞の使用が不活発な地域があることを見てきた。そうした地域では、とりたての意味をまったく言語化しないのではなく、何らかの代替措置を講じている可能性がある。そのように、専用の文法形式を用意するのではなく、語用論的なレベルで当該の文法的意味を装うのがこの論文で言う「擬似的文法表現」である。

それでは、とりたてについては、どのような擬似的文法表現が見られるだろうか。ここでは、観察された表現を次の５つに分類してみた。

①終助詞による代替

②反語表現による代替
③副詞による代替
④語彙的限定による代替
⑤反復による代替

以下、順に見ていくことにしよう。

４．１．終助詞による代替

まず、「は」のもつ特立の機能が、終助詞によって代替されることがある。

先の第２節では、例えば第161図「見はしない」において、「は」を用いずに「見ない」のような基本形を回答する地域のあったことを指摘した。ところが、そうした地域の中に、文末が裸のままではなく、「見ないジャ」「見ないゾ」「見ないモン」などのように終助詞が付加したケースが認められる。それらの回答は、凡例の見出しでは、〈minee-zja,zo,zoo,doo,na,naa,ja,jo,wa〉や〈mine-onaa,ON,gode, godee,sa,zja,zo,dɛ,dee,dja,do,moN,jo,Nda〉などと表示されるように、終助詞の部分を統合したかたちで地図化されており、かなり多くの回答が終助詞付きであったことがうかがえる。

終助詞の付いた形は、もちろん「見はしない」のような「は」を持つ形式の回答にも現れている。しかし、「見ない」のような「は」を持たない形式と、終助詞の付加とは何か関わりがありそうである。そこで、「は」の不使用と、終助詞の使用との関係を見るために、先ほどの**図１**に、終助詞付きの形式が回答された地点をマークしてみたのが**図２**である。

この図を見て明らかなように、「見はしない」の地域より「見ない」の地域の方に終助詞付き回答が多く現れている。つまり、「見ない」が優勢な東北・北関東から北陸にかけての地域と九州西部以南の地域がそうであり、「見はしない」が強い地域の中でも、ぽつんぽつんと現れる「見ない」の地点に終助詞付き回答の地点がかなり重なっている。すなわち、「は」の不使用と、終助詞の付加との間には一定の相関関係が認められる。これは、終助詞が「は」の代役を果たしていることを示唆する結果である。

それでは、なぜ「は」の役割を終助詞が担うことができるのか。それは、とりたてという、ある種の活性化した概念を、論理的なものとしてではなく、近似の心理的な様相として理解し表現するというメカニズムがはたらいているからだと思われる。「は」のもつ特立の機能はあくまでも論理の世界のものである。それに対して終助詞の担う役割はモーダルなものであり、あえてプリミティブな言い方をすれば、一種の強調であると言ってよい。両者は一見、別次元のもののように見えるが、似通う面もある。すなわち、特立とはそのものを他から際立たせることであるが、それは心情的には強い主張にも通じるものである。類似の概念を、一方は論理の視点から、一方は心理の視点から照らし出していると言ってもよい。

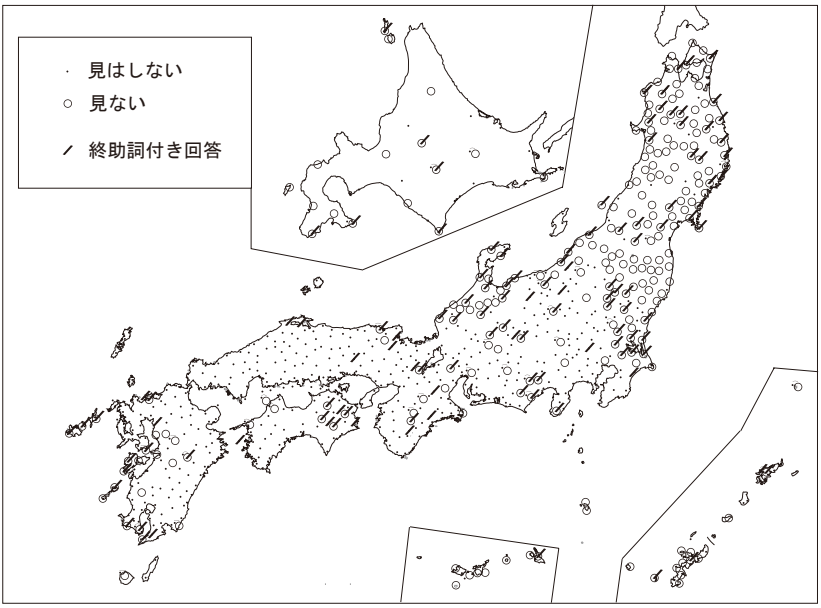

図２　「見はしない」における終助詞付き回答（ＧＡＪ第161図より）

もっとも、「見はしない」の場合は「見ること」に焦点を当てて否定しているのに対して、「見ないぞ」の場合は「見ないこと」全体をひっくるめて相手に強く持ちかけている。つまり、その構造は大きく異なる。しかし、「見はしない」と言ったとき、そこには文全体として「ぞ」の使用に匹敵する話し手の強い気持ちを感じ取ることは難しくない。構造の違いを越えて、両者が与える印象には類似点があり、そこに終助詞による代替の契機があると見てよい。

なお、終助詞による代替はとりたてのみでなく、次のように、他の文法範疇にも同様に観察される現象である。地理的には、やはり東日本、特に東北を中心とした地域に目立つようである。

○第205図「読んでしまった（完了）」→「読んだッチャ」「読んだハ」など
○第200図「今にも散りそうだ（将然）」→「散るゾ」「散るナ」など
○第106図「起きよう（意志）」→「起きるゾ」「起きるカ」など

これらの擬似的文法表現が成立することについては、小林（2015）でひとつの解釈を述べておいた。これらも、結局のところ、論理的な文法機能を心理的な表出機構に置き換えて表現するものであり、その点で、「は」の場合と共通のメカニズムが認められる。

4．2．反語表現による代替

次に、「は」によるとりたてが、反語表現によって代替される場合もある。

例えば、第161図「見はしない」では、「見るもんか」「見ようか」といった反語表現の回答が現れている。それらの回答はこの項目では無回答とはされず、地図に示されている。凡例上、〈mirumoɴka〉〈miɴmoɴka〉〈miimokka〉〈mirumoɴdaga〉〈mirugotoakka-jo〉〈miruka〉〈mizukee〉〈mirobaja〉〈miɴbajaa〉〈minanosoobaja〉がそれであり、大きく「見るもんか」の類と「見ようか」の類に分けられる。以下に具体的に示す。

○「見るもんか」の類

・ミルモンカ（岩手県九戸郡種市町、栃木県下都賀郡壬生町、長野県小県郡真田町）
・ミンモンカ（千葉県富津市）
・ミーモッカ（千葉県長生郡白子町）
・ミルモンダガ（山形県酒田市飛島）
・ミルゴトアッカヨ（茨城県鹿島郡旭村）
・ミルカ（徳島県海部郡牟岐町）

○「見ようか」の類

・ミズケー（長野県上伊那郡南箕輪村）
・ミロバヤ（山形県酒田市、同西田川郡温海町）
・ミンバヤー（山形県新庄市）
・ミナノソーバヤ（山形県酒田市）

これらの回答は量的にはわずかであるが、地域的に見るとほぼ東日本に限られていることがわかる。

なお、「見はしない」はあくまでも「見ること」をとりたてて否定する表現であるが、「見るもんか」「見ようか」などの反語表現は文全体の趣旨である「見ないこと」を強く主張するものである。そのように文全体に関わるという点で、反語表現は上の4．1で見た終助詞による表現と構造的に類似すると言ってよい。また、反語表現は、聞き手に強く持ちかけ共感を得ようとするものであり、そうしたモーダルな表現という点でも終助詞による表現と共通する。

4．3．副詞による代替

次に、副詞が「は」の役割を肩代わりしているケースが見られる。

例えば、第161図「見はしない」において単に「見ない」となっている地点の中には、次のように「絶対」「決して」などに当たる副詞を伴う回答がなされた場合がある（『方言文法全国地図解説4』107頁。〔　〕内は調査者の注記）。

・ホッテモ　ミネァ〔ホッテモは「絶対」の意味〕（山形県飽海郡八幡町）
・カイモク　ミン〔「さっぱり見ない」の意〕（石川県小松市）

・ケッシテ　ミネァー（千葉県香取郡多古町）
・ヒトツモ　ミンゾ〔ヒトツモは「見はしない」の「は」の心持ちを出したもの。「ちっとも」「少しも」の意である。〕（香川県仲多度郡琴南町）
・キレー　ミンモン（長崎県南高来郡有家町）

また、第54図「傘なんか（いらない）」では、『方言文法全国地図解説1』216・402頁によれば、次のような「もう」に対応する副詞の加わった回答が得られている。このうち、岩手の「ハー」はすでに感動詞化し、一種の強調表現となっている可能性がある。

・カサ　ハー（岩手県花巻市）
・カサ　ハ（岩手県岩手郡雫石町）
・カサ　マー（愛知県名古屋市）

さらに、第60図「今日こそ（終わらせる）」の項目でも、副詞的な表現が入り込む回答が得られている（『方言文法全国地図解説１』427・428頁）。それらの回答はすでに第３節の（４）に掲げたとおりであり、「ドーデモ　キョー」「キョーナンデカンデ」といった「どうしても　今日φ」「今日φ　どうしても」の類と、「キョー　ハー」のような「今日φ　もう」の類が該当する。

以上の副詞による表現は、総じて東日本と九州に目立つようである。なお、とりたての機能が、「特に」「とりわけ」等の「とりたての副詞」によって果たされることは、日本語記述文法研究会編（2009）なども記している。しかし、以上の例のとおり、ＧＡＪの回答では陳述副詞の類がその役割を担っているように見える。「ひとつも」や「もう」のように程度副詞や情態副詞に分類できそうなものもあるが、それらも陳述性が濃く、総じてモーダルな性格の強い副詞が用いられていると言ってよい。

４．４．語彙的限定による代替

次に、焦点となる語の意味を限定する語彙的要素を付加することで、「は」のニュアンスを表そうとする場合が見られる。これを「語彙的限定」と名付けてみた。

具体的には、第３節で取り上げた次のような回答であり、東日本と沖縄に見られる。

○第44図「お茶でも（飲もう）」の「茶（の）一杯」の類
・オチャノイッパイ（北海道釧路郡釧路町）
・チャイッパイ（岐阜県吉城郡河合村）

○第60図「今日こそ（終わらせる）」の「今日いっぱいで」「今日の終わりに」の類
・キョーイッパイデ（富山県魚津市）
・suːɸittʃiːni（沖縄県国頭郡国頭村字佐手）
・キョーノオワリニ（秋田県湯沢市）

「茶（の）一杯」の類は「お茶でも」の「でも」のニュアンスを「一杯」で表現したものであろう。選択的例示のもつ消極的な雰囲気が、「一杯」という、やはり控えめな言葉で代替されたと考えられる。また、「今日いっぱいで」「今日の終わりに」の類は、調査文の文脈が終了に関わるものであることから、「こそ」の特立性を終了限界の表示によって表そうしたものと思われる。

４．５．反復による代替

次に、節の反復がとりたて助詞の代わりをしていると思われる場合がある。

第48図「（食って）寝るだけなら」の項目で「その他」に分類された回答には、「食っちゃ寝喰っちゃ寝するなら」に当たる表現が見られる（『方言文法全国地図解説１』379頁）。

・クッチャネクッチャネスルナラ（北海道江別市）
・クッテネークッテネシッコンダラ（山形県西置賜郡飯豊町）
・クッチャネークッチャネースリャー（京都府与謝郡岩滝町）

また、次の琉球地方の回答は、「寝る」の部分を繰り返すものである。

・nïburinïburisïrïba（鹿児島県大島郡笠利町佐仁）
・nibuɲibuiʃu:sa:（鹿児島県大島郡与論町麦屋東区）
・nimbinimbisibaja（沖縄県国頭郡国頭村字佐手）
・nimbinimbiʃi:ne:（沖縄県名護市字名護）
・nindʒinindʒisunumuɲjara:（沖縄県中頭郡勝連町字平敷屋）

これらは、「だけ」のもつ「それしかしない」という限定の意味を反転させ、「そればかりしている」という反復の表現で表したものと考えられる。動詞節の場合にはこうした代替表現がとられることもある。

５．擬似的文法表現の発想法

前節では、擬似的文法表現の具体的な様相について検討してきた。そこで触れたことも含めて、ここでは擬似的文法表現のもつ発想法上の特徴について、あらためて考えてみたい。

（１）“理屈”より“気持ち”に傾く文法

まず、「は」の考察において、代替措置として終助詞的手段を利用するのは、とりたてという論理的なシステムを、心理的な操作に置き換えて表現するからだ、というようなことを述べた。「とりたて」という文法的意味の実現を、近似の効果をもたらす、ある種の「強調」という心情的な作用によって肩代わりするのである。この点は、主観性の強い反語表現による代替も同様に解釈できるであろう。また、モーダルな副詞を投入する手法も同じように理解することが可能である。

このことは、文法を組み立てる際、“理屈”の問題を“気持ち”の問題に変換して処理しようとする方言が存在することを示唆する。調査において、共通語文法の理屈で質問されても、それに対応する理屈をもたない地域では、話者は気持ちのレベルの表現によって適当な答えを探そうとする。共通語文法の論理的なしくみがそのままでは当てはまらず、心理的な操作の手を借りることで対応しようとする方言が存在するということである。

ところで、ここまで「擬似」や「代替」という言葉を使ってきた。しかし、それはあくまでも共通語を基準にした見方であり、方言の側に視点を置いたとらえ方ではない。調査の場で話者が適当な回答を探しあぐね、代わりにそれらしい言い方を答える、という点では擬似や代替と言ってもよい。だが、話者の日常の言語生活においては、そうした言い方がむしろ普通なのだと考えるべきである。そういう方言の話者にとっては、毎度、論理的なものを心理的なものに置き換えて表現しているわけではなく、そもそも、とりたて的な意味合いを、心情的な手立てによって実現する発想法を備えているのである。

“理屈”の世界に“気持ち”が染み出し、文法の世界に心情が深く関与するという点で、そうした文法は「論理的文法」に対して「心理的文法」などと呼んでもよいだろう。あるいは、それが機能する場が、狭い意味での文法のレベルではなく、広く語用論のレベルに及ぶという点をとらえれば、「文法レベルの文法（狭義文法）」に対して「語用論レベルの文法（広義文法）」とでも名付けることが可能かもしれない。

（2）“節レベル”より“文レベル”を好む文法

次に、この論文で取り上げたさまざま擬似的文法表現を見ると、とりたての形式を、共通語では節の周辺で構築しようとするのに対して、方言の中には文全体で形成しようとする地域があることがわかる。このことは、“節レベル”より“文レベル”を志向する発想法が方言にあることを示唆する。

共通語のとりたてのシステムは、とりたて助詞に頼る部分が大きいが、それらはもちろん付属語である。つまり、「お茶でも」「傘なんか」「今日こそ」「見はしない」「食って寝るだけなら」のように名詞や動詞、連語など付き、ある種の派生によってとりたて形式を作り上げる。文の要素である節の内部にとりたて助詞を入り込ませ、とりたてる単位に付けて一体化させるところに特徴がある。これは“節レベル”のとりたてシステムと見てよい。

擬似的文法表現で見られた方式の中でこれに近いのは、語彙的限定の方法である。節の内部に入り込み、とりたてる要素に付加されるという点では、「お茶（の）一杯」「今日いっぱい」「今日の終わり」なども、とりたて助詞の方式と同様である。ただ、とりたて助詞が付属語であるのに対して、「一杯」「いっぱい」「終わり」などは自立語であり、複合語や連語を作る点が異なる（とりたて助詞の成立が語

彙的単位の文法化によると考えられる点も、両者の連続性を物語る)。また、反復表現の場合は、とりたてる要素自体に手を加える方式であるが、やはり語彙的操作であり、付属語の取り付けとは発想を異にする。

一方、終助詞や副詞による方式は以上のような“節レベル”の操作とは異なり、“文レベル”でとりたて形式を組み立てようとするものである。まず、終助詞による表現は文の末尾に終助詞を加えるもので、文全体をひとまとめにして強調するような方式である。また、これと同じく、反語表現による方法も文全体に関わるシステムをもっており、それを担う形式は終助詞と同様、文の最後に位置する。これに対して、副詞の使用は、それ自体で節を構成する副詞を文の中に投入し、他の文の要素（節）との関係を構築するやり方である。とりたて助詞のように、節の内部で操作されるものと異なり、“文レベル”の方式と言える。

以上のように、とりたての形式をどのように作るかに注目すると、共通語と方言で違いのあることがわかる。共通語では、とりたて助詞を節の内部に入り込ませ、とりたてる要素に密着させる“節レベル”の方式を採るのに対して、方言には、節の内部であっても語彙的操作に頼ったり、さらには、終助詞や副詞のような“文レベル”で操作する方式をとったりする場合が見られる。“節レベル”ではとりたてる要素がピンポイントで絞られるのに対して、“文レベル”ではその点が曖昧で、とりたてというよりは強調といった方がよいものになる。この点でこの問題は、上の（1）の問題にもつながることになる。

ここまで述べてきたことのうち、（1）の「“理屈”より“気持ち”に傾く文法」というのは、とりたての意味的な側面を取り上げたものである。また、（2）の「“節レベル”より“文レベル”を好む文法」というのは、とりたての形式的な側面を問題にしたものと言える。（1）（2）を通して考えると、「とりたて」という文法的概念が、意味的にも、形式的にも十分成立していない地域が、日本語方言の中には存在するのではないかということになる。とりたて助詞というシステムを積極的に活用する発想は、日本全国に行き渡っているわけではなさそうである。

6．まとめ

以上、この論文で述べてきたことを簡単にまとめてみよう。

①方言学的に見ると、構造的な意味でのいわゆる「文法」が発達しておらず、語用論的な操作でそれらしく文法的なニュアンスを表現している地域がありそうだ。そうした表現を、「擬似的文法表現」と呼びたい。

②「とりたて」という文法範疇について見ると、共通語では文法体系の一部を占めるとりたて助詞を使用しない状況が方言に認められる。そうした傾向が強いのは北陸を含めた東日本であり、九州・琉球などにもその傾向が観察さ

れる。

③それらの地域では、擬似的文法表現として、終助詞の付加、反語表現、副詞の投入、語彙的限定、反復表現といった手法を用いる。それらは、意味的には心理的操作による一種の「強調」という側面が強く、形式的には節レベルより文レベルで処理しようとする方法が目立つ。

なお、こうした性質をもつ方言は、とりたての専用形式が発達する以前の段階を反映している可能性がある。この点は、通時的に見ても興味深い問題と言える。さらに言えば、ここで仮説的に述べたことは、とりたてに留まらず、文法全般にあてはまる可能性がある。論理より心理に頼り、節より文のレベルで操作する傾向は、東日本や九州以南の文法のさまざまな側面に広くうかがえるものかもしれない。また、それらの状況は、歴史的には現代共通語のような文法システムが整うより前の状況と対応することが想像される。

いずれにしても、日本語方言の中には、文法というものに対して、共通語とは異なる発想法で向き合おうとする地域が存在することに目を向ける必要がある。敬語研究の対象がいわゆる「敬語」から「待遇表現」、そして「配慮表現」へと発展していったように、文法研究もその対象を狭義の文法から広義の文法へと拡張することで、新たな発見を導く可能性は十分あり得る。この論文は、そのような期待を込めて執筆したつもりである。

なお、今回はＧＡＪを資料とした考察であり、イントネーションなどの音調面についてはまったく触れることができなかった。形式重視の文法システムが貧弱な地域では、音調的操作がそれを補っていることが予測されるが、そうした問題は今後の課題としなければならない。

注

（1）「とりたて詞」「とりたて助詞」等の呼び方があるが、ここでは日本語記述文法研究会編（2009）などに従い、「とりたて助詞」とした。なお、具体的な助詞の意味・用法については、奥津敬一郎・沼田善子・杉本武（1986）や沼田善子・野田尚史編（2003）、沼田善子（2009）を参考にした。

文献

奥津敬一郎・沼田善子・杉本武（1986）『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社

国立国語研究所編（1989～2006）『方言文法全国地図』全6巻、大蔵省印刷局・財務省印刷局・国立印刷局

小林隆（2007）「文法的発想の地域差と日本語史」『日本語学』26-11

小林隆（2010）「日本語方言の形成過程と方言接触－東日本方言における“受け手の論理”－」『日本語学』29-14

小林隆（2015）「東北方言の特質－言語的発想法の視点から－」益岡隆志編『日本語研究とその可能性』開拓社

小林隆（2017）「言語的発想法と方言形成－オノマトペへの志向性をもとに－」大西拓一郎編『空

間と時間の中の方言－ことばの変化は方言地図にどう現れるか－』朝倉書店
日本語記述文法研究会編（2009）『現代日本語文法５』くろしお出版
沼田善子（2009）『現代日本語とりたて詞の研究』ひつじ書房
沼田善子・野田尚史編（2003）『日本語のとりたて－現代語と歴史的変化・地理的変異－』くろしお出版

付記

この論文は、NINJALシンポジウム「日本語の名詞周辺の文法現象－名詞修飾表現ととりたて表現－」（2017年12月23日、国立国語研究所）で発表した内容を発展させたものである。席上、貴重なご意見をくださった方々に、あらためて感謝申し上げる。